

生涯学習ふじさわプラン2021 最終評価結果報告書

藤沢市社会教育委員会議

目 次

1 前文	P2
2 基本目標1 学びたいことがかなう環境を整える	P3~6
3 基本目標2 市民の学びが生きる環境を整える	P7~10
4 基本目標3 藤沢の生涯学習社会を広げ支える	P11~14
5 各基本目標に通底する課題について	P15~16
6 総括	P17

担当課による効果（目標）の達成度における「効果の達成度」の基準

- 4 十分成果があがっている
- 3 成果はあがっているが成果向上の余地がある
- 2 一部成果があがっているが成果向上の余地が大いにある
- 1 未実施もしくは見直しが必要

社会教育委員会議における抽出事業評価結果における「課題認識及び課題への取組について」の基準

- 3 課題が明確で取組も評価できる
- 2 課題は明確だが取組は要検討
- 1 課題が不明確で取組を見直す必要がある

最終報告書 前文

藤沢市では「生涯学習ふじさわプラン 2021」を 2017 年 3 月に策定した。

策定にあたり、市では市民に対し、生涯学習に関わるアンケートや国の動向などの調査を行い、その調査結果等を踏まえて、社会教育委員会議では、提言書「藤沢市の生涯学習施策のあり方について～次期生涯学習ふじさわプラン策定にむけて～」(2016年6月27日)を提出した。

この提言を基に、市ではプラン 2021 の基本理念を定め、理念に基づく基本目標、施策の方向を決め、施策を講じ、2017 年度から 2021 年度までの 5 年間に亘り、市の生涯学習を推進してきた。

その進捗管理については、社会教育委員会議において、毎年度、重点的取組（ア 地域課題の解決に向けた取組、イ 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした取組、ウ 生涯学習推進事業の再構築、エ 歴史、文化芸術やスポーツ等の多様な資源の活用）に当たる事業を中心に抽出し、視察を行い、評価結果報告書としてまとめてきた。

本年度は、事業の担当課より出された自己評価報告と、これまで視察を踏まえて行ってきた事業評価結果を、プラン 2021 が掲げてきた「基本理念、基本目標、施策の方向」に照らし合わせて改めて考察し、それらの事業が基本理念、基本目標等に資するものであったかを検討する。これをもって「生涯学習ふじさわプラン 2021」の最終評価報告とする。

生涯学習ふじさわプラン 2021 の基本理念

『一人ひとりの学びから地域の人がつながり藤沢の未来を創造する』

基本目標 1 学びたいことがかなう環境を整える

＜施策の方向 1＞「学びへと向かうきっかけづくりとなる学習支援」

＜施策の方向 2＞「多様な学びに応じた学習支援」

1 担当課による効果（目標）の達成度

評価結果	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度
効果（目標）達成度の平均	2.96	3.04	3.04	2.93	2.85

市民が学びへと向かうきっかけづくりのために、生涯学習に関する情報の積極的な発信や学習相談機能の充実、市民の集う場づくりの拡充を図った。また、あらゆる世代の市民が、ライフステージに応じた幅広い学習プログラムに参加できるよう、継続的な学習機会の充実や、個々の学習スタイルに応じた学習機会の提供を図ることで、学びのバリアフリー化に取り組んだ。

コロナ禍のため、対面で実施する事業については、令和 2 年度を中心に参加者数や利用者数が大幅に落ち込んだものもあるが、令和 3 年度には、感染防止対策を考慮して、実施形態や手法を検討して開催しており、多くの事業が実績を持ち直している。また、コロナ禍で Z o o m 等の I C T の活用が進み、学びのバリアフリー化が一層進展した側面もあった。周知啓発については、認知度の向上や周知方法の検討が課題となっている事業も多くあったが、ホームページやアプリの活用等により、コロナ前よりも利用者数を伸ばした事業もあった。

2 社会教育委員会における抽出事業評価結果

事業名	事業による効果（目標）の達成度	課題認識及び課題への取組について
No.13 公民館における乳幼児家庭教育学級事業 (令和 3 年評価)	3	2

多くの保護者と子どもが参加できるように日々、工夫をされていることと思います。実際の乳幼児をもつ保護者のニーズとのマッチングにズレが生じているのではないかと、いう所で、事業開催後のアンケート内容を改めて見直すことも良いのではないのでしょうか。また、オンラインでの開催も取り入れているとのことですが、これからは with コロナという観点からオンラインでつながるといった方向に変わっていくことが大いに考えられる中、対面に負けず劣らずの事業が開催できることを期待いたします。

ある意味、公民館は事業案内や周知方法が生命線であると思います。時代を経るにつれて参加者層も変化し、周知・連絡に関する媒体や手段も大きく変わってきました。初めて乳幼児をもつ両親も不安や悩みを抱えながら参加してくると思われれます。なのでできれば、子育てが一段落した方々が保育ボランティアなど何かしらの形でリーダーとなって、その経験やノウハウを次世代の子育て世代へ継承されるような働きかけも行ってほしいです。

No.15 公民館における青少年対象事業 (令和3年評価)	3	2
<p>コロナや東京2020大会開催の経験を活かして、また学校と連携しながら、事業の工夫改善を進めていただきたいと思います。</p> <p>中高校生が公民館に足を運ぶのはどういう時なのか検証も必要ではないかと思いますが、学習室の開放は価値があると考えます。また、小学生が保護者と共に関わる事業においては、事業担当が安心感やスムーズなプログラムの運営等考えられるので、保護者への投げ掛けも必要ではないでしょうか。</p> <p>子どもたちは地域で生まれ、地域で育ちます。たとえ地域を離れることがあっても、その地域をふるさとであると感じてほしいと思います。そんな地域に根ざした公民館事業も続けていってほしいと願います。</p> <p>なお、担当課である生涯学習総務課におかれましては、個々の公民館の事業実施フォローだけでなく、事業報告書に記載された「小学生や中高生がボランティアとして育成されるような事業」や「子どもたちが継続的に公民館と関われる事業」を各公民館が実施できるような環境整備や地区ごとの特性を考慮できるような資料作成など、市全体を見渡せる立場を生かせる行政としての活動を洗い出されてはいかがでしょうか。</p>		
No.17 公民館における高齢者対象事業 (令和3年評価)	3	2
<p>昨年度はコロナ禍という未曾有の事態の結果、多くの課題が現出したように思えます。その中で、各部署が高齢者を対象とした事業を工夫をしながら実施したことが分かりました。今後ますます高齢者は増加し続け、様々なカテゴリーやニーズが出てくると思います。だからこそ、現在の事業を各部署だけではなく、参加者側からの意見・感想も含めて統合的に精査し、その整合性をとりつつ連携した事業展開が必要になります。高齢者にとりまして広い意味での仲間づくりはいろいろな面で有意義になります。これらの点を踏まえ、次期以降の事業展開に反映していただきたいと思います。</p>		
No.19-1 生涯学習大学放送通信コース事業 (令和2年評価)	3	2
<p>東京2020大会で、藤沢市がポルトガル共和国のホストタウンとなったことから「初めてのポルトガル語」を開講したり、「郷土愛あふれる藤沢」を目指して「中世大庭の魅力」を開講したりするなど、時宜を得た、また地域の特性を生かしたテーマを設定している点は評価できます。今後は、市民から意見を募ったり、市役所内の他部署の要望やアイデアを活用するなど、幅広く企画を募ることも検討していただきたいと思います。また、フィールドワークの際に学芸員を活用するなど、よりきめ細かな対応も望まれます。来年は、大河ドラマで鎌倉幕府の草創期が取り上げられますが、関連テーマについての開講を検討するとともに広報にも力を注ぎ、市民からの認知度を飛躍的にアップさせる機会としていただきたいと思います。</p>		

No.21 図書館宅配サービス・点字図書館事業 (令和3年評価)	4	2
-------------------------------------	---	---

公的機関の図書館が目指す「参加機会を提供する」素晴らしい事業であると視察を通じて再確認させていただきました。ヒアリングを通じて、クオリティが高い印象と、事業運営者と利用者相互の想いなどに触れることができ、「学びの持つ力」を教えていただく機会にもなりました。これからも「藤沢らしさ」を大切にさせていただきながら事業をすすめていただければと思います。

3 基本目標1についての最終評価

(1) 評価

抽出事業を中心に総合的な評価を行った結果、公民館事業、図書館事業及び生涯学習大学事業において、市民のニーズを踏まえた工夫のもと多様な学習支援事業が執行されていたことが認められた。例えば、生涯学習大学事業中の放送通信事業等に対する受講者の満足度が高かったこと、ホームページの活用により事業の目的が詳らかになり、学びたい場所の提供に寄与していたこと、図書館事業における点字図書館、宅配事業は、ボランティアの尽力により基本目標1を体現するものであったことが挙げられる。

このように、各事業とも概ね「生涯学習ふじさわプラン2021」の施策の方向に資するものであり、成果もあがっていたものと認められる。

(2) 指摘

- ア シニア・高齢者、子育て・親子（乳幼児）をターゲットにした事業が多く、社会的弱者に目を向け手厚くした点は妥当であったが、勤労者や学生など、限られた時間で学びたい人をターゲットとしたものは少なかった。
- イ 公民館においては、活動を希望する団体が場所を確保することが難しいことから、学びたいことがかなう環境に資すると言い難い部分があった。
- ウ 情報発信に問題があり、認知度が低い事業があった。
- エ オンラインの基盤が整っていなかった。

(3) 課題

評価及び指摘を踏まえ、次のように課題を提起しておく。

- ア 事業の認知度を高めるため、市民に対する周知方法について、ICTの進展を踏まえ、情報発信手段の多様化等を含め柔軟に対応するとともに、オンライン開催の利便性をより一層高める必要がある。
- イ 市民ボランティアの育成・活用を一層図る必要がある。
- ウ 市民団体、関係部署、教育機関及び専門職との間の連携を深めることによって事業の改善を図るとともに、事業の継続性を確保する必要がある。
- エ 各地区の特性や藤沢らしさを活かして事業を展開し、市民の認知度をより一層高める必要がある。
- オ 助けが必要な若年層等、具体的な目的なく公民館等に来た人が参加できるような

事業を含め、インクルーシブの観点をもった事業展開がより一層必要である。

カ 公民館職員の対応が館によって違うので、公民館間のより一層の情報共有が必要である。

キ 市民センター・公民館（併設）は教育施設と地域住民の連携の場所というバランスをうまくとった事業、場所の確保を考える必要がある。

基本目標 2 市民の学びが生きる環境を整える

施策の方向 1 「学習成果を共有するための環境づくり」

施策の方向 2 「学習成果を活用するための環境づくり」

1 担当課による効果（目標）の達成度

評価結果	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度
効果（目標）達成度の平均	2.96	2.82	2.96	2.56	2.78

地域活動に積極的に参加するための機会や、学習成果を披露する場を設けることで学んだことを伝えたり、ボランティア活動やサポーター等として、人のために生かす機会を設けることで、学ぶ目的を明確化させ、意欲をより高めることができた。また、学習成果の活用のためには、多様な主体との連携が不可欠となることから、地域の中のような学習資源を活用し、マルチパートナーシップに基づく学習活動の推進を図った。学習活動を通じた市民や団体同士の、世代間・地域間・テーマ間の交流は、地域コミュニティの活性化にもつながることから、交流によりつながりが深まる場の提供に努めた。

学習成果を共有する環境づくりについては、対面での開催が中心となる各ボランティアの育成や発表の場づくり等が中心であり、コロナ禍の影響を受けて軒並み受講者数が減少したが、生涯学習大学や市民ギャラリーのようにオンライン開催に変更したり、感染防止対策を図りながら実施方法を検討することで、参加者を伸ばした事業もある。しかしながら、総じて地域や団体主催の事業は、感染防止対策が難しく、中止にせざるを得ないものも多く、感染防止対策のために少人数化することで、スタッフ一人あたりの負担が増えている状況も浮き彫りになった。

施策の方向 2 「学習成果を活用するための環境づくり」については、公民館等を中心に、地域団体や企業、学校等と連携した事業が積極的に進められた。

2 社会教育委員会における抽出事業評価結果

事業名	事業による効果（目標）の達成度	課題認識及び課題への取組について
No.27 オリンピック・パラリンピック ボランティア養成事業 (平成 30 年評価)	3	2

担当課がオリンピック・パラリンピック開催準備室であるのなら、この事業についてはオリンピック・パラリンピックボランティア養成に留めるのが適当である。担当課の持つ仕事の幅が広すぎて、このような将来まで見据えた事業のままでは達成が困難なのではないかと考える。「レガシーとしてのボランティア文化の定着」を目指す部分は、他の部署（課や団体）との連携が欠かせない。

No.27 オリンピック・パラリンピック ボランティア養成事業 (令和元年評価)	3	2
<p>オリンピック・パラリンピックをきっかけに、様々なボランティア活動や地域・市民活動の活性化が図られることがレガシーであり、都市ボランティアとしての経験やネットワークが一時的なものとして終わることなく、文化として定着させるためには、他の部署や団体との連携は不可欠である。また、活動についての情報発信も重要と感じた。</p> <p>これまでの進捗状況から担当課では、藤沢市民の都市ボランティアへの感心や意識の高さには期待が持てているように感じられた。また、ボランティア文化の裾野拡大に向けての計画についても聞くことができた。</p> <p>視察当日も暑い日であったが、本番はより過酷な天候が予想される。テントなどの用意はあったが、炎天下日陰のない場所での活動については、体調管理に十分な配慮が必要と感じた。</p>		
No.30-② 健康づくりに関する ボランティア養成事業 (令和元年評価)	3	2
<p>健康増進課の皆さんとサポーターの方たちとの交流は着実に図られており取り組みに関しては一定以上の評価ができるというのが委員全員の感想です。Bでも一部コメントしましたが、今後の活動に関しては次のような内容を提言させて戴きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サポーターの自主性を助長する支援やサポーター同士が指導・助言し合う仕組み作り ・住民のより身近ところでの活動の場の提供を目的とした、医師会や包括支援センター、関連各課やみらい創造財団、或いは、地域の大学などとのより一層の連携推進 		
No.33 生涯学習大学市民講師コース事業 (平成30年評価)	3	2
<p>市民大学からの継承事業であること、平成31年度の組織変更を控えていることなどの状況の中で、現在の背景とともにある課題にどこまで対応するかは大きなポイントになると思います。</p> <p>その中で、今回の視察のように市民講師企画講座で素晴らしい講座を開催して「藤沢の良さ」も含めて講師の方自身のもつ力を伝えてくださる市民の方がいることは貴重な財産だと思います。</p> <p>講師を集める、企画講座・フェスタで場をつくる、というところをテーマとして見ていただきながら、取り組んでいただければと思います。</p>		
No.33 生涯学習大学市民講師コース事業 (令和元年評価)	3.5	2
<p>講師登録希望者数や講師派遣の依頼件数ともに安定しており、この仕組みが活用され機能していると感じた。活動が単独になりがちな講師活動が生涯学習活動推進室という場を用い講師間の情報交換や市民へのアピールを強化している方向性は評価に値し、ま</p>		

た「推進室」の意義をとらえ活用方法を模索している姿勢に期待が感じられた。短期間での成果を求めるには難しく、今後他の課や学校、地域などと連携を強めるなどさらなる工夫が期待される。

No.33 生涯学習大学市民講師コース事業
(令和2年評価)

3

3

事業目標を達成しようと努力する担当者の姿勢が素晴らしい。オンラインと対面における「つながる」という事に関して議論・検討の余地がある。

「藤沢ならではの」の取り組みを意識している様子に好感触を持った。今後も地域の特性を活かした取り組みを継続して欲しい。

財政環境や社会状況の変化に左右されない安定的な事業実施ができるよう生涯学習事業全体の「基本的な運営方針」の策定を期待したい。

3 基本目標2についての最終評価

(1) 評価

抽出事業を中心に総合的な評価を行った結果、ボランティア養成事業において、ボランティア文化の裾野拡大に相当程度寄与したことが認められたほか、生涯学習大学市民講師コース事業において、地域の特性を活かした取組のもと安定的な利用が認められた。各事業とも概ね「生涯学習ふじさわプラン 2021」の施策の方向に資するものであり、成果もあがっていたものと認められる。

(2) 指摘

ア オリンピック・パラリンピックボランティア活動を重視していたが、実際はその活動はできなかったことから、レガシーとなっているのか等の評価は難しい。その一方で、オリンピック・パラリンピック準備等に基づいたボランティア活動もあり、それらから活動が定着しつつあるとの評価がある。(両論を併記する)

イ 藤沢市には体育館が2つしかないという現状がある。また、冷房がない等利用者にとって健康、災害発生時等を考慮した環境設備が整っているとは言い難いが、市の進捗管理では具体案が出ていない。

ウ 企画はあるが実現に至っていないケースにおいて、他部署との連携がうまく取れていないことがあった。

エ スポーツ都市宣言をしているにも関わらず、民間の体育館ではできることが、市の体育館ではできないことがあるなど、市の取組に疑問を感じる。

オ 市の職員の蓄積された経験が、異動によって活かしきれていない事業があった。

カ 人材バンクなどデータ化していても周知が足りず、情報共有に問題がある事業があった。

キ 市民の社会参加や新たな生涯学習への取組を促し、自己実現を図っていくための、コーディネート力とマッチングが不足していた。

(3) 課題

評価及び指摘を踏まえ、次のように課題を提起しておく。

ア ボランティア文化の定着を図るため、関係部署・団体との連携を強化するとともに、ボランティアに対する指導・助言等の支援の仕組みを作る必要がある。

イ 市民講師間の情報交換、市民へのアピール強化の方向性を維持しつつ、関係部署、学校、地域との連携を強化するとともに、体験講座「ふらっとフラッポ」を拡充するほか、生涯学習事業全体の「基本的な運営方針」を策定する必要がある。

ウ 施設の早急な整備が必要である。

エ 人材バンクのスポーツ分野を拡充するなど、市の人材を生かして今後の活動につなげていけるよう、具体的な課題解決案の提示が必要である。その際に、各部署間の横の連携ができていれば、さらに環境が整ったと考えられる。

基本目標 3 藤沢の生涯学習社会を広げ支える

施策の方向 1 「藤沢を活性化する新たな学びの構築」

施策の方向 2 「生涯学習社会を支える人材の育成」

施策の方向 3 「未来へ学びを推進する体制の充実」

1 担当課による効果（目標）の達成度

評価結果	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度
効果（目標）達成度の平均	3.13	3.03	2.98	2.68	2.89

藤沢の自然や文化、歴史等に対する誇りや愛着を深める学習機会の充実を図ることで、地域の再発見につながる学びを深めることができた。また、藤沢の生涯学習社会を支えていく中で、人材育成は喫緊の課題となっているため、新たな人材の掘り起こしや社会教育に携わる人材のスキルアップを図った。

また、学習成果を生かし、継続的な活動を行っていくためには、市民の学習に対するモチベーションを高める仕組みも必要となることから、成果に対する表彰を実施するとともに、社会教育施設の運営に市民の意見を取り入れる機会を設けた。

藤沢を活性化する新たな学びの構築については、環境や地域包括ケア等の社会的な課題や藤沢を知るための文化、歴史に関連する事業を中心に多くの方が参加した。人材育成については、市民センター等を中心に、地域を支える人材発掘や育成を図ったが、参加者を実際の活動につなげるマッチングが課題となっている。また、社会教育施設等を運営するための審議会等の意見を踏まえ、今後の生涯学習推進に向けた体制・計画づくりの推進を図った。

2 社会教育委員会議における抽出事業評価結果

事業名	事業による効果（目標）の達成度	課題認識及び課題への取組について
No.59 ふじさわ宿交流館事業 (令和元年評価)	4	3

集客を目的とするイベント開催や地域の活性化を視野に入れた地域商店街との連携への取り組みなど、積極的な活動に感銘を受けました。

意見交換でもあげられましたが、今後の取り組みとしては現在の事業を継続しながら、次世代への継承を考慮した事業にも展開があればと思います。(例：小中学校への出前教室（キャリア教育等含む）、高等学校等への連携（若者の SNS 発信力への期待))

リピート率も 40%ほどあるので、交流館の良さを広げていく可能性を持っていると思います。今後も工夫が実を結ぶことを切望しています。ありがとうございました。

No.60 藤澤浮世絵館事業 (令和2年評価)	2	2
<p>施設や資料の素晴らしさは申し分ないと思います。それだけにこの来館者数は勿体ないと感じます。課題にも記しましたが、市民への周知を促すための告知方法を一工夫する必要がありますと思います。そのほか教育機関への働きかけでは教師をどう動かすかも考えていただきたい。今回初めて来館した社会教育委員も学芸員の説明を聞きながら見ることで、浮世絵に大いに興味を抱き、再度来館したいという感想もありました。この素晴らしい施設をもっと市民に知ってもらいたいと思い、今後の浮世絵館事業に期待します。</p>		
No.61 アートスペース事業 (平成30年評価)	3	3
<p>ヒアリングを行って、「美術館」ではなく「若手芸術家の創作活動および展示・発表等の支援」を重要視し、それを活発にさせるおもしろい仕組みをたくさん知ることができた。「美術」を中心とする文化芸術のまちとしての新たな魅力を加え、文化都市「藤沢」の価値を高めることを目標に、4つのコンセプトを基本にして活動していることはたいへん重要である。ただ、現在行政施設の中では1番とっていいほど、SNSやチラシなどさまざまな媒体を用いて、広報活動を行っているということを知った。チラシの配布場所を市外（ひいては都内など）の美術館やそれに類する施設へ配架を行ったり、現代アートに興味関心のある人へ向けたイベント・展示の企画によって文化芸術に関心のある層にアプローチが可能なのではと感じた。市内在住の方へのアプローチは現状の広報の方法を続けつつ、市にゆかりのある芸術家や芸術作品に絡めた展示を継続して展開するのがよいのではないか。ヒアリングと見学を通じ、とても魅力的な事業であることがわかり、周知されていないことは勿体無いと感じた。今後も若手アーティストや市民に周知を試み、足を運んでもらい、引き続き事業の実績を積んでいって、“文化芸術の創造、発信の拠点”として、発展して欲しい。</p>		
No.68 地域人材育成・活用事業 (平成30年評価)	3	2.7
<p>「人の役に立ちたい。自分のスキルを活かしたい。できる範囲でなら市民活動に参加したい。」という意識を持つ住民は多いといわれる。</p> <p>その中で、各市民センターが掲げる「地域人材育成・活用事業」は大きな役割を有している。その原点に立った、「どうやったら市民が参加しやすい機能を作り上げられるか」を考え実施していくことは、大変重要な案件である。</p> <p>しかし、各センターでそれぞれの問題点が挙げられている。その中で、六会市民センターのように機能していても、担当コーディネーターの不足で実現できていない部分があるもどかしさが挙げられているが、これは担当者の拡充で解決に導けるものであるから、問題点としては最重要なものに位置づける必要はないであろう。</p> <p>この事業の全体像は、住民の必要とする事柄と、提供できる住民のコーディネートである。したがって、そのコーディネートに関してのシステムの構築こそが最重要課題で</p>		

あろう。もし、そのシステムが構築できていないのならば、その根本理念を担当者がどのくらい重要視し理解しているのかを疑問視せざるを得ない。問題点が不明瞭、または改善策が見いだせない場合は、各市民センターで具体的な実施策や改善案の意見交換を積極的にし、問題点及び改善策を共有し合うことが必要であろう。

今回の視察では、片瀬市民センターの実施状況が群を抜いている感があった。実績のある他のセンターの実施状況を取り入れ、できる限り速やかに実施していくことが、たとえ地域特性があると言っても、問題点の解決につながる最良の方法と考える。

No.78 公民館運営方針の検討（公民館評議員会・公民館運営審議会）（令和2年評価）	3	3
<p>①公民館の運営・事業については、毎年示される「公民館事業計画基本方針」を元に、各館がフィードバックとして事業に対する自己評価を行い、公民館評議員会の評価を受けて、PDCA サイクルを回すよう努めている。生涯学習総務課においては、各館の評議員会の評価を受けて、社会情勢や国・県の動向を反映したうえで、公民館運営審議会で審議を行い、今後の方向性について検討を行ったうえで、各館に示している。ただし、各館全体の運営については、平成26年度から市直営に戻す中で、様々な課題を継続して検討する中で、ご指摘の通り、具体的な検討が進んでいない部分があるため、公民館運営審議会において来年度の検討課題としていきたい。</p> <p>②成果目標が具体的な指標を示すことができていないため、達成度を測ることが難しくなっている。実績をはじめとした経年評価の記載内容の見直しを図るとともに、成果目標についても追加・修正を行い整合性をとることで、より分かりやすい評価に努める。</p>		

3 基本目標3についての最終評価

(1) 評価

抽出事業を中心に総合的な評価を行った結果、ふじさわ宿交流館事業、藤澤浮世絵館事業及びアートスペース事業において、イベントや展示に積極的な取組がなされたことが認められた。具体的には、ふじさわ宿交流館は、地域や商店街と連携して、地域活性化に向け積極的に活動をしていた。藤澤浮世絵館事業は人気ある多色刷りの体験、また、若い人向けの事業に取り組み、社会教育委員による進言等を生かし、周知を図るなど努力を重ねていた。アートスペース事業は、次世代を担う若い世代の参加も多く、レジデンス（作成中の様子を見ることができる場所）というコンセプトがよかった。これらのことから文化都市「藤沢」の価値を高めるなどの成果が認められたほか、地域人材育成・活用事業において、地域活動活性化の拠点として重要な役割を果たしていることが認められた。また、公民館運営方針の検討については、公民館評議員会及び公民館運営審議会の評価・審議のもとで適切に進められていることが認められた。

このように、各事業とも概ね「生涯学習ふじさわプラン2021」の施策の方向に資するものであり、成果もあがっていたものと認められる。

(2) 指摘

- ア 浮世絵館のチラシは学校にも送られているが、実際に見学するまでに至っていないかった。
- イ アートスペースは、現代アート育成・応援の場となっており、興味がないと理解しがたい面がある。また、ワークショップへの参加者が少ないので、PRの方法を工夫すべきである。

(3) 課題

- 評価及び指摘を踏まえ、次のように課題を提起しておく。
- ア 文化、歴史、芸術に関する事業について、学校へのさらなるアウトリーチ活動等、様々な教育機関との連携や効果的な周知方法の工夫が必要である。
 - イ 浮世絵館事業等は、デジタルツアーなど、館に足を運べない市民に対してのサービスの検討が必要である。さらに、足を運べる市民に対しても関心を寄せてもらうために、デジタル活用が必要である。
 - ウ アートスペースは、事業別評価結果報告に示されている課題への具体的な取組について積極的に考える必要があり、その際、どのように取り組むかが、今後の運営推進等のポイントになる。
 - エ 地域人材育成・活用に際し、コーディネートシステムを構築するため、各公民館で問題点及び改善点を共有するほか、実績のある館の実施状況を取り入れる必要がある。
 - オ 公民館事業に対する市民のニーズに応えるため、組織やサポート体制の検討、また公民館事業計画基本方針の検討やプロセスについて関係部署等との連携を考える必要がある。

各基本目標に通底する課題について

各基本目標に通底する課題について提起された意見及び様々な視点から出された意見を提示しておく。

1 各基本目標に通底する課題について提起された意見

(1) 抽出事業及び評価方法の明確化

ア 重点的取組に位置付けられた事業を中心に現地視察や評価を行ったが、評価する事業抽出に偏りがあり、幅広く事業抽出を行うべきである。

イ 目標等の表現があいまいなため、何を評価すればよいかわからないものもあった。数値目標として可能なものは定量化するべきである。また、必ずしも数値だけで割れ切れないものもあるので、その事業の意義などから定性的な目標設定が必要である。

ウ 評価を点数化して示すことの必要性は検討が必要である。

(2) 情報発信

ア 学びたいことがかなう環境を整えるには「情報を市民に届ける」ということが必要であり情報発信の工夫は必須である。

イ ホームページなどは、アクセスしたいところに届くこと、使い勝手をよくすること、効率化すること、使う側に立って考えることが大事であるが、具体的方策が取られていなかった。例えば、「広報ふじさわ」に生涯学習に特化した別刷り（二次元コード等情報へアクセスする手段を掲載したもの）を入れるなど、具体的方策が必要である。

(3) ICT 活用

今までは対面等のリアルだけで考えられていたが、デジタル活用も考えなければならぬ。公民館においては、技術的またハード的に難しい面もある中、検討して実施した館もあったが、各担当者の IT リテラシーによるところも見受けられた。また「デジタルでできなかった」とした館もあったが、実際に行おうとしたのか書かれておらず読み取ることができない。企業の会議などはリモートで行われている場合もあり、生涯学習においても可能であると考えられる。コロナ禍に関わらず、子育て中など、対面等のリアルが難しい状況にある人も多い。ICT 整備が迫いついておらず早急な対応が必要であったことは否めない。

(4) コーディネート

多方面で地域人材育成・活用、マッチングに際して、差配できるコーディネート機能は重要だが最も脆弱なところである。具体的な仕組みの早急な整備が必須である。

2 様々な視点から出された意見

- (1) 「生涯学習プラットフォーム」(イメージ図) が漠然としていて、全体をイメージするには不明確であった。
- (2) プラン 2021 策定時「藤沢の生涯学習は藤沢の文化である」としていきたいという思いがあった。
- (3) 善行にある収蔵庫は、藤沢の漁労文化等貴重な資料が保管されている。市の方針では、博物館は造らないとしているが、貴重な文化歴史資料保存のためにも必要である。
- (4) 2020 年度からは新型コロナウイルスの影響により直接事業を見ることができず、事業も実施できないものも多かった。
- (5) コロナ禍、ICT 整備途上など、過渡期であった。
- (6) 本市への流入人口が増加傾向にあることから、地域に於いて自己実現を希望する勤労者の学びたいことが叶う環境整備が求められる。
- (7) 地域とのつながりを持ちたいと考える勤労世代や若者世代が相談しやすい場の提供も必要である。
- (8) 点字図書館(基本目標 1)において、点字作製はボランティアであり、点字図書館も見方によっては「ボランティア育成」という基本目標の 3 にも該当する。生涯学習は自己実現の場でもあり、ユーザー側と提供する側では視点が違うため、多角的で他にも影響を及ぼしている。
- (9) 点字図書館のようにボランティア活動によって培う学びが自己実現になるのではないか。

総括

以上の通り、プラン 2021 の基本理念に基づいて実施されてきた各事業は、概ねそれぞれの目標を達成したと認められる。よって、それらの事業はプラン 2021 が掲げる基本理念、基本目標に資するものであったと結論付ける。よって基本理念、基本目標に資するものであったと結論付ける。

但し、各基本目標特有の課題、及び各基本目標に通底する課題を提起した。

特に通底する課題として挙げた、市民へ確実に情報を届けるための情報発信の具体策とその実施、多方面に亘るマッチング等を行うコーディネート力、評価基準の明確な設定、そしてコロナ禍のために、対面学習が阻まれたことで表面化した ICT 環境整備の必要性等は、藤沢市の生涯学習推進において、最も図らなければならないところである。

また様々な視点から出された意見には、藤沢市の生涯学習の推進のために更なる努力が求められていることが表れている。

プラン 2021 は既に終了し、現在はプラン 2026 が遂行されている。ここに挙げられた評価、課題の提起、そして意見が、これからも継続されていく今後の藤沢市の生涯学習推進に当たっての一助になれば幸いに思う。